

# 精神科実習の社会復帰活動における看護の 役割についての学生の学び

—— 実習記録からの分析 ——

Learning of the student about the role of the nursing in  
the rehabilitation activity of the psychiatric nursing practice

木村 緑      加賀谷 紀子      三浦 広美

**要約** 本研究は3年次に担当している精神看護実習での実習目標である「社会復帰活動における看護の役割を理解できる」に照らし合わせ、学生が実習をとおしての学びと課題を明らかにすることである目的として質的帰納的分析を行った。

分析の結果、22のサブカテゴリ、7つのカテゴリ【多職種連携】【社会資源の検討】【疾患のコントロール能力を高める援助】【退院後の生活を円滑におくるための援助】【ストレングスを高める援助】【認知的側面への援助】【家族支援】が導出された。

## I. はじめに

平成18年4月1日「障害者自立支援法」が施行され、その後一部改正され「障害者総合支援法（障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律）」が、平成25年4月に施行された。趣旨は地域社会における共生の実現に向けて障害福祉サービスの充実等障がい者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するため新たな障害福祉施策を講じるもの<sup>1)</sup>である。精神科領域においては、長期入院から社会復帰をめざし精神障害者社会

復帰施設および精神障害者居宅生活支援事業の充実を重要視するものであり、病院や施設において自立のためのプログラム作成や社会復帰活動に対し、積極的に関わり成果を上げつつある。このことを受けて本看護学科においても社会復帰活動に関する学習を重要視し実習目標に位置づけて、学習できたことを実習終了時まとめとして記録用紙に記載し振り返りを行っている。

精神看護実習は3年次の領域別実習として

位置づけられ、90時間2単位で構成されている。精神科実習の目的は「精神障害の特徴を総合的に理解し、健康問題と健康回復に向けてのセルフケア向上に必要な看護援助の技法を身に付けること」である。実習目標は5つを掲げており①精神障害のある対象者を理解でき、環境への配慮ができる。②対象者の生活環境を考慮しながら、セルフケア能力の向上に向けた看護過程の実際を学ぶ。③対象者と看護師の相互関係の中で、自己を振り返り対象者への対応について理解できる。④対象者に現れている精神症状を把握し、治療経過における看護の役割を理解できる。⑤社会復帰活動における看護の役割を理解できる。としている。

学生は2週間の実習を通して1名の患者を受け持ち、看護過程を展開し実習目標の達成に向けて学んでいくのだが⑤社会復帰活動

における看護の役割を理解できるについては看護過程の展開とともに「障害者総合支援法（障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律）」や近年の精神医療の動向に関する知識をもとに学生が学びを深めていく必要がある。そのため、実習前課題として精神医療及び社会復帰に関する課題を課し、実習日程には1日の通所実習と約半日の外来実習を設けている。実習内容については、学生の学びが深まるよう検討を重ねていく必要があり、特に実習目標⑤社会復帰活動における看護の役割を理解できる。については、これからの精神看護において重要な位置づけとなると考えられる。そこで本研究では実習目標⑤社会復帰活動における看護の役割を理解できるに着目し学生の学びと課題を明らかにすることを目的として実習記録の分析を行った。

## II. 研究 方 法

### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究

### 2. 分析対象

八戸学院短期大学看護学科 第4期生 64名の精神科実習記録（記録用紙10 実習のまとめ）

### 3. 分析方法

分析方法は質的帰納的分析方法を用いた。同意が得られた学生の記録用紙10「実習のまとめ」の中にある実習目標⑤社会復帰活動における看護の役割の理解できる。に書か

れている内容について読み、学びが記述されている内容について、内容・語彙の意味を変えないよう要約し1データとした。1コードに要約された内容のうち類似するものをまとめてサブカテゴリーとし、さらにカテゴリーへと抽象化していった。カテゴリー化については共同研究者間で妥当性についての検討を行った。

### 4. 倫理的配慮

学生には研究の目的、個人が特定されない事、参加の同意や拒否が成績に関与しないことを説明し同意を得た。

### III. 結 果

学びをカテゴリーとしてまとめた結果、22のサブカテゴリーから、7つのカテゴリーが抽出された。＜ ＞内はコードを「 」内はサブカテゴリーを【 】内はカテゴリーを表す。

#### 1. カテゴリー 1【多職種連携】

【多職種連携】には「多職種と連携した患者支援」「施設との情報共有」「多職種との調整役を担う」が含まれる。

「多職種と連携した患者支援」とは＜施設での生活ができるよう精神保健福祉士と連携していくことが必要＞＜医師、作業療法士、管理栄養士等の職種との連携が必要＞＜服薬管理について薬剤師や外来看護師と連携して服薬支援を行っている＞＜多職種でチームを組み持っている知識を用いてケアしていくことが必要＞といった各職種が連携し専門性をいかした支援の必要性を示している。

「施設との情報共有」とは＜患者の自立度に関する情報を施設と共有して援助する＞といったコードで表されており、施設と情報共有をして援助を進めていく連携の必要性を示している。

「多職種との調整役を担う」とは＜多職種と情報共有し中継役となり患者を支える＞といった看護師が多職種と情報共有し中継や調整を担うことが患者支援につながることを示している。

#### 2. カテゴリー 2【社会資源の検討】

【社会資源の検討】には「退院に向けた社会資源の検討」「個別性に応じた社会復帰の立案」が含まれる。

「退院に向けた社会資源の検討」とは＜その人に合った社会資源を提供していく＞＜患者が活用できる社会資源を提供する＞＜退院後の生活状況を把握し、必要な社会資源を把握する援助＞＜退院に向けた社会資源の利用を検討する＞といったコードで表されており、患者の退院後の生活状況に応じた社会資源の提供の必要性が示されている。

「個別性に応じた社会復帰の立案」とは＜何の支援があれば地域に戻ることができるかを考えて援助する＞＜個別性を見極め患者に合った社会復帰の方法を考える＞といった患者の個別性に応じた社会復帰を立案し援助につなげていく必要性を示している。

#### 3. カテゴリー 3【疾患のコントロール能力を高める援助】

【疾患のコントロール能力を高める援助】には「患者主体の薬物療法への援助」「再発防止に努める援助」「病気の知識を高める援助」が含まれる。

「患者主体の薬物療法への援助」とは＜退院後患者自身が、薬物療法の自己管理を行えるような援助＞＜現在服用している薬剤について患者の意思決定を尊重してかかわる＞といった薬物療法について患者と協調的に関わる必要性を示している。

「再発防止に努める援助」とは＜患者とともに目標を決め再発防止に努める援助＞といった患者の希望や目標などに着目した援助を示している。

「病気の知識を高める援助」とは＜うまく病気と向き合っていけるような知識や情報を

提供する><どのように病気にかかわっていくかを考える機会を作る><病気や薬についての知識を深める援助>といったコードで表されており、病気や薬について患者の知識を高めるリテラシー向上に向けた援助の必要性を示している。

#### 4. カテゴリー4【退院後の生活を円滑に おくるための援助】

【退院後の生活を円滑におくるための援助】には「社会復帰に必要な支援の立案」「退院に向けての患者の症状観察」「退院後の生活状況に応じた援助」「手段的ADLを高める援助」「円滑な人間関係の構築に向けた援助」が含まれる。

「社会復帰に必要な支援の立案」とは<社会復帰するために何が 필요한かを観察して取り組む><社会復帰できるかどうかを日々の関わりの中から判断し見極めていく事>といったコードで表されており、病棟内での患者との関わりは社会復帰を目標とした視点で考え、取り組んでいく必要性を示している。

「退院に向けての患者の症状観察」とは<患者の症状を日々観察し退院できるかを判断><観察して退院に向けて支援していく>といったコードで表されており、退院を視野に入れた症状観察の必要性を示している。

「退院後の生活状況に応じた援助」とは<よい生活リズムを習慣化する><退院後の生活を見越して今やるべき援助を行う><退院後の生活に向けた援助をしていく><退院後のもどる場所を踏まえてかかわっていく>といったコードで表されており、患者の退院後の生活状況を把握して援助を行うことを示している。

「手段的ADLを高める援助」とは<交通機関や金融機関などの利用ができるように援助する>といった、長期入院や症状により低下した手段的ADLを高め、社会生活を営んでいけるような援助を示している。

「円滑な人間関係の構築に向けた援助」とは<人間関係に慣れていく援助が必要><コミュニケーション能力を高める援助>のコードで表されており、コミュニケーション能力を高め人間関係に働きかける援助の必要性を示している。

#### 5. カテゴリー5【ストレングスを高める 援助】

【ストレングスを高める援助】には「自己決定の再獲得に向けた援助」「長所を生かした援助」「患者の望む生活の実現に向けた援助」「その人らしさを支える援助」「楽しみを見つけ活動性を高める援助」が含まれる。

「自己決定の再獲得に向けた援助」とは<自己決定能力の再獲得に向けた援助>のコードで表され、疾患により低下した自己決定能力の再獲得に向けた援助の必要性を示している。

「長所を生かした援助」とは<成功体験を積み重ねられるように支援することが大事><長所を生かし変化のきっかけとなる取り組みが必要>といった、成功体験を積み重ねることで自己効力感を高める支援や患者の長所といったストレングスを生かした援助を示している。

「患者の望む生活の実現に向けた援助」とは<患者が考える目標を達成できるような援助><患者が退院後どのようなことを望んでいるかを把握する><患者のニーズや生活に

合ったケアを考えていく援助」といったコードで表され、患者主体の生活に着目した援助を示している。

「その人らしさを支える援助」とはくその人らしさを理解して生活を支援していく援助><その人らしく生活できるように支援していく事が必要>といった個別性を理解し、その人に合った生活を営んでいけるような援助の必要性を示している。

「楽しみを見つけ活動性を高める援助」とはく患者の楽しみを見つけ、外に出るきっかけを作る援助><活動性を高める援助>といったコードで表されており、患者とともに楽しみを見つけ、活動に結びつける援助を示している。

#### 6. カテゴリー6【認知的側面への援助】

【認知的側面への援助】には「服薬に対する悩みの傾聴」「退院後の生活に対する不安への援助」「考え方や物事の捉え方を変えられるような援助」が含まれる。

「服薬に対する悩みの傾聴」とはく服薬な

どの悩みを傾聴する>のコードで表されており服薬に対する患者の思いや悩みを傾聴する援助が示されている。

「退院後の生活に対する不安への援助」とはく患者の希望する生活ができるように不安を軽減していく援助>のコードで表されており、不安の軽減に向けた援助を示している。

「考え方や物事の捉え方を変えられるような援助」とはく患者自身の考え方や物事の捉え方を変えられるようなかわり>のコードで示されており患者の認知的変容に向けた援助を示している。

#### 7. カテゴリー7【家族支援】

【家族支援】には「家族教育への援助」が含まれる。

「家族教育への援助」とはく支える家族の知識の向上や負担の軽減に向けた援助><家族を交えた教育や説明が必要>といったコードで表されており、患者を支える家族の負担の軽減や知識を高める援助の必要性を示している。

## IV. 考 察

### 1. 社会復帰活動における看護の役割についての学生の学び

精神科実習における「社会復帰活動における看護の役割」について学生は【多職種連携】【社会資源の検討】【疾患のコントロール能力を高める援助】【退院後の生活を円滑におくるための援助】【ストレスを高める援助】【認知的側面への援助】【家族支援】の7つのカテゴリーに関する学びを得ていた。

【多職種連携】については、患者の社会復帰を促進していくにあたり、病棟のみならず他職種や他部門、社会復帰施設との連携の必要性を学ぶことができていた。また連携という役割は直接的な患者援助につながるばかりではなく、他職種間の情報共有や調整役を担うといった橋渡しの役割を看護師は担っている事を理解することができていた。

【社会資源の検討】については精神科領域



における社会資源は多岐にわたり複雑である。また、その社会資源により法的根拠は異なり、度重なる法律改正のため看護学生にとっては理解しにくい部分でもある。社会資源に関する手続きは精神保健福祉士を中心に行われる場合が多いが、看護師が入院当初より、何の支援があれば地域に戻れるのかといった視点で評価や援助を行うことは、社会復帰活動における看護の役割として重要である。精神科実習を通して社会資源の検討の必要性といったカテゴリーが抽出されたことは、学生が病気だけに注目するのではなく、生活者としての視点で患者をとらえていた結果と評価することができる。

【疾患のコントロール能力を高める援助】については患者自身が疾患や薬物療法についての知識を高め、疾患とうまく付き合うことが回復に向けて重要であると学生が認識した結果と考えられる。今までの精神科医療は長くパターンリズムに傾きがちであったが、最近の精神科医療の方向性として患者自身が疾患とうまく付き合い、コントロールしていく事が重要であるとされている。精神科実習において学生は医療者が援助をするだけでなく、患者自身の力を引き出し能動的に治療に取り組めることが社会復帰において必要であるということを学ぶことができていたと考えられる。

【退院後の生活を円滑におくるための援助】について学生は患者の観察や、退院後の住む場所などの情報を収集し、退院後の生活を考えながら必要な援助を導き出していたと考えられる。実習の中で行われる援助は、生活リズムを整えることや症状観察といった一般的な援助であることが多いが、社会復帰を目指

していくには疾病や障害に関するその人固有の症状や変化の観察とアセスメントが重要<sup>2)</sup>であり、援助の根拠は退院後の生活を踏まえて行われていることが重要である。精神看護実習を通して、日々病棟で行われている援助が社会復帰につながるという捉え方を学ぶことが出来ていたと考えられる。

【ストレスを高める援助】については患者の長所、希望、楽しみ、その人らしさという個人が持つストレス（強み）に着目することが社会復帰活動における看護の役割であるという学びを得ていた。しかし、実習中の場面では精神症状の強い患者を受け持った学生は問題指向型での考え方が優先され、社会復帰へ考えが及ばない場合もあった。またストレスは、カルテなどから得られるものではなく、学生が患者と向き合い、関わっていかねば見つけられないものである。患者のストレスを見つけ、援助に生かしていくためには学生自身が様々な価値を受け入れ柔軟に相手を見る力が必要であろう。本研究で【ストレスを高める援助】がカテゴリーとして導かれたことは、学生の多くが患者と向き合い、価値観を受け入れることができた結果ともいえる。精神看護において他者の価値観を受け入れる他者理解は大切なことである。他者理解をするということはまず自己理解するということが前提にあり、初めて理解するものと考えられる。今後は他者理解や自己理解が深まるような事前指導の充実が必要である。

【認知的側面への援助】について、学生は服薬や生活上の悩みや不安の傾聴とともに物事の捉え方を考えるといった認知的側面への働きかけが社会復帰における看護の役割とし

て学んでいた。しかし、その一方で認知的側面は可視化しにくく援助に難しさを感じる学生もいた。認知的側面への援助は、退院し疾患を自己管理しながら社会生活を営んでいく上で大切なものである。認知や感情など可視化しにくい部分の観察は知識と経験が必要となってくる。学生が実習を通して認知的側面への援助をより充実させていくには知識の向

上とともに経験的な学習が必要と思われる。

【家族支援】については家族の負担の軽減とともに知識の向上に向けた支援が必要である。精神看護実習の場面では家族の思いに触れる機会が少ない現状にあるが面会に来た際などを利用して、実際に家族支援を行っていく機会を作っていく事が必要と考える。

## V. ま と め

今回「社会復帰活動における看護の役割についての学生の学び」について分析を行った。学生は精神看護実習を通じて【多職種連携】【社会資源の検討】【疾患のコントロール能力を高める援助】【退院後の生活を円滑にするための援助】【ストレスを高める援助】

【認知的側面への援助】【家族支援】についての学びを得ていた。今後学生の学びをより充実させていくには社会復帰に関する法律や社会資源の活用の学習とともに、可視化しにくい認知的側面に関する学習、家族支援の方法についての指導が必要と考えられる。

## VI. 引用参考文献

- 1) 厚生労働省ホームページ：[http://www.mhlw.go.jp/kokoro/nation/4\\_04\\_00law.html](http://www.mhlw.go.jp/kokoro/nation/4_04_00law.html) 2015/5/12 閲覧
- 2) 林谷啓美、田中 論：精神障がい者が地域で生活していくための支援活動に関する課題と探訪。園田学園女子大学論文集：第 48 号，2014.1
- 3) 高橋香織、片岡三佳：精神看護学臨地実習後のレポート分析から見た学び。岐阜県立看護大学紀要：第 6 巻 1 号，2005
- 4) 東中須恵子、村木士郎、岡本響子：精神看護学臨地実習における看護学生の学びに関する研究。harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hbg/file/7292/.../v10-02-03.pdf 2015/8/12 閲覧
- 5) 大賀淳子：多様性をめざした精神看護学実習—訪問看護実習の意義—。大分看護科学研究：4(2) 48-52，2003